

学校現場の「学級づくり」を支える教育センターの取組  
～「スリンプル・プログラム」のスムーズな導入に向けて～（2年次）

島根県教育センター浜田教育センター  
教育相談スタッフ 共同研究

## 目 次

|                                       |    |
|---------------------------------------|----|
| 【要旨】                                  | 1  |
| 1 研究の背景                               | 1  |
| (1) 島根県内における不登校の現状                    | 1  |
| (2) 1年次に明らかになったこと                     | 2  |
| 2 今年度の研究の目的                           | 3  |
| 3 研究の方法                               | 3  |
| (1) 「スリンプル・プログラム」の導入と継続的な取組の調査        | 3  |
| (2) 「スリンプル・プログラム」の学校への導入サポートの実践       | 3  |
| 4 研究の内容                               | 4  |
| (1) 県内の教育委員会の調査                       | 4  |
| (2) 大分県教育センターの調査                      | 6  |
| (3) 先進的な学校の調査                         | 10 |
| (4) 「スリンプル・プログラム」の学校への導入サポートならびに成果と課題 | 15 |
| 5 実践および研究の考察とまとめ                      | 19 |
| (1) 当センターのサポート体制について                  | 19 |
| (2) 次年度に向けて                           | 20 |
| 【引用文献】                                | 21 |
| 【参考文献】                                | 22 |

# 学校現場の「学級づくり」を支える教育センターの取組 ～「スリンプル・プログラム」のスムーズな導入に向けて～（2年次）

島根県教育センター 浜田教育センター 教育相談スタッフ 共同研究

---

## 【 要 旨 】

不登校の児童生徒数は、全国的に増加傾向に歯止めがかかっていない状況があり、島根県も同様の状況にある。令和4年に改訂された生徒指導提要では、不登校の未然防止に向けて新たに積極的生徒指導に取り組む必要性が謳われている。具体的な不登校の未然防止のためのアプローチとして様々な取組や方法があるが、その一つの方法として、児童生徒同士等が互いにかかわる力を高めることで児童生徒等のよりよい関係づくりが進み、その結果、不登校の未然防止につながる事が考えられる。

そこで、児童生徒同士等のかかわる力を高めることを目的とした、かかわりプログラム Simple 代表 曾山和彦氏の提唱する「スリンプル・プログラム」に着目した。「スリンプル・プログラム」の導入サポートの在り方や、「スリンプル・プログラム」をきっかけにしながら、児童生徒の関係づくりに対する教職員の意識の変容についてまとめていく。そこから、教職員の関係づくりに対する意識の高まりが、不登校の未然防止の第一歩となる児童生徒同士の関係改善につながる事が分かった。

【キーワード：不登校の未然防止 かかわる力 関係づくり】

---

## 1 研究の背景

### （1）島根県内における不登校の現状

「令和5年度生徒指導上の諸課題に関する状況について」によると、島根県内小中学校の不登校児童生徒数については、令和5年度も高い傾向で推移しており、1,000人当たりの小中学校の不登校児童生徒数ともに8年連続の増加になる。公立高等学校においても、不登校生徒数については、増加に転じている（島根県教育庁教育指導課 R6:p2）。小中高等学校すべての校種において、全国平均と比べて不登校児童生徒数が多く、島根県の教育における大きな課題の一つであると言える。

島根県教育センター 浜田教育センター（以下、当センターとする）でも、不登校を主訴とした相談は多く、不登校の状態になってからの学校復帰には多くのエネルギーが必要となる。

不登校になった児童生徒の背景は様々であるが、近年の新型コロナウイルスの流行により、様々な教育活動や学校行事が制限され、児童生徒同士等のかかわりや協働体験の機会が減っていることなどで、学校での児童生徒同士の人間関係が希薄になっていることも不登校児童生徒の増加と関連性があるのではないかと考えた。また、「令和4年度児童生徒の

問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」(文部科学省)を基に「不登校に関するアンケート調査」が行われた(図1)(図2)。調査結果のまとめとして、不登校を経験した児童生徒本人の受け止めとしては人間関係に起因するものが多い傾向があり、文部科学省調査時に要因を分類している学校との認識に違いがあることが分かった(島根県教育庁教育指導課R6:p3)。

|                                           |                           | (単位:人)            |            |          |       |         |               |          |             |              |         |        |              |        |         |
|-------------------------------------------|---------------------------|-------------------|------------|----------|-------|---------|---------------|----------|-------------|--------------|---------|--------|--------------|--------|---------|
|                                           |                           | 学校に係る状況           |            |          |       |         |               |          |             | 家庭に係る状況      |         |        | 本人に係る状況      |        | 左記に該当なし |
|                                           |                           | いじめ               | 間人いじめをめぐる友 | を教め職員の関係 | 学業の不振 | 進路に係る不安 | 応活クラブ等への活動不適部 | を学校のきまり等 | 適学入学、進級転編の不 | の家庭急激な生活変化環境 | 親子の関わり方 | 家庭内の不和 | れ、生活リズム、非の行乱 | 無気力、不安 |         |
| (1) 令和4年度<br>文科省調査<br>小学校不登校児童数<br>(788人) | 主たるもの<br>(一人一つ選択)         | 3                 | 62         | 5        | 31    | 0       | 0             | 4        | 27          | 21           | 90      | 8      | 86           | 383    | 68      |
|                                           | 割合                        | 0.4%              | 7.9%       | 0.6%     | 3.9%  | 0.0%    | 0.0%          | 0.5%     | 3.4%        | 2.7%         | 11.4%   | 1.0%   | 10.9%        | 48.6%  | 8.6%    |
| (2) 県調査<br>小学校不登校経験者<br>延べ数(167)          | 主たるもの<br>(一人一つ選択)         | 46                | 16         | 20       | 9     | 0       | 1             | 0        | 1           | 2            | 2       |        | 0            | 27     | 43      |
|                                           | 割合                        | 27.5%             | 9.6%       | 12.0%    | 5.4%  | 0.0%    | 0.6%          | 0.0%     | 0.6%        | 1.2%         | 1.2%    |        | 0.0%         | 16.2%  | 25.7%   |
|                                           | うち、低学年<br>(1～3年)<br>(39)  | 主たるもの<br>(一人一つ選択) | 17         | 2        | 2     | 4       | 0             | 1        | 0           | 1            | 1       |        | 0            | 5      | 6       |
|                                           |                           | 割合                | 43.6%      | 5.1%     | 5.1%  | 10.3%   | 0.0%          | 2.6%     | 0.0%        | 2.6%         | 2.6%    |        | 0.0%         | 12.8%  | 15.4%   |
|                                           | うち、高学年<br>(4～6年)<br>(128) | 主たるもの<br>(一人一つ選択) | 29         | 14       | 18    | 5       | 0             | 0        | 1           | 1            | 1       |        | 0            | 22     | 37      |
|                                           |                           | 割合                | 22.7%      | 10.9%    | 14.1% | 3.9%    | 0.0%          | 0.0%     | 0.8%        | 0.8%         | 0.8%    |        | 0.0%         | 17.2%  | 28.9%   |

※割合は、小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計は必ずしも100とはならない。

「不登校に関するアンケート調査について」より一部抜粋 R6.6 島根県教育庁教育指導課

※強調のための囲い枠は筆者が施す

図1 小学校在籍時に不登校であった児童についてのアンケート結果

|                                             |                   | (単位:人)  |            |          |       |         |               |          |             |              |         |        |              |        |         |
|---------------------------------------------|-------------------|---------|------------|----------|-------|---------|---------------|----------|-------------|--------------|---------|--------|--------------|--------|---------|
|                                             |                   | 学校に係る状況 |            |          |       |         |               |          |             | 家庭に係る状況      |         |        | 本人に係る状況      |        | 左記に該当なし |
|                                             |                   | いじめ     | 間人いじめをめぐる友 | を教め職員の関係 | 学業の不振 | 進路に係る不安 | 応活クラブ等への活動不適部 | を学校のきまり等 | 適学入学、進級転編の不 | の家庭急激な生活変化環境 | 親子の関わり方 | 家庭内の不和 | れ、生活リズム、非の行乱 | 無気力、不安 |         |
| (1) 令和4年度<br>文科省調査<br>中学校不登校生徒数<br>(1,123人) | 主たるもの<br>(一人一つ選択) | 7       | 111        | 5        | 60    | 9       | 7             | 4        | 45          | 21           | 54      | 10     | 133          | 515    | 142     |
|                                             | 割合                | 0.6%    | 9.9%       | 0.4%     | 5.3%  | 0.8%    | 0.6%          | 0.4%     | 4.0%        | 1.9%         | 4.8%    | 0.9%   | 11.8%        | 45.9%  | 12.6%   |
| (2) 県調査<br>中学校不登校経験者<br>延べ数(435)            | 主たるもの<br>(一人一つ選択) | 72      | 60         | 33       | 18    | 1       | 9             | 0        | 5           | 7            | 4       |        | 10           | 62     | 154     |
|                                             | 割合                | 16.6%   | 13.8%      | 7.6%     | 4.1%  | 0.2%    | 2.1%          | 0.0%     | 1.1%        | 1.6%         | 0.9%    |        | 2.3%         | 14.3%  | 35.4%   |

「不登校に関するアンケート調査について」より一部抜粋 R6.6 島根県教育庁教育指導課

※強調のための囲い枠は筆者が施す

図2 中学校在籍時に不登校であった生徒についてのアンケート結果

これらの結果からも、児童生徒同士等の関係改善がなされることは、児童生徒が学校に通いやすくなる、不登校の未然防止につながるきっかけになるのではないかと考える。

(2) 1年次に明らかになったこと

1年次に実施したアンケート結果より、教職経験の浅い教職員ほど学級づくりや児童生徒の仲間づくりに困難を感じていることが明らかになった。その点を踏まえると、そのような教職員などに向けての集団づくりプログラムの提供は、教職員のニーズにも合致すると考えられる。また、アンケートの中で「うまくいっている学級づくりのキーワード」の問いに対しては「人と人との関係性」に関するワードが多く、かかわりの力を育てること

を目指している「スリンプル・プログラム」との親和性は高いと考えた。教職経験6年目及び中堅に該当する教職員の中の一定数は「スリンプル・プログラム」を知っており、学級づくりや児童生徒の仲間づくりの必要性を強く感じていることから、このプログラムを活用し、校内OJTを機能させて、困り感を感じている若手を中堅以降の教職員が中心となって引っ張っていくことが期待される。ただ、多忙な学校現場であることを考えると「まずは自分の学級からはじめてみたい」という教職員への何らかのサポートは必要である。

## 2 今年度の研究の目的

令和5年11月に文部科学省より、「不登校の児童生徒等への支援の充実について（通知）」が出された。その中の「不登校児童生徒への支援に対する基本的な考え方（別紙）」によれば、誰もが安心して学べる魅力ある学校づくりに取り組んでいくことが求められており、次のような記載がある。

- ・ 入学直後や学級・ホームルーム替えの時期をはじめ、年間を通じて、日々の授業や特別活動、朝の会・帰りの会等の教育活動全体の中で、他の児童生徒や教職員との人間関係の形成に資する活動を十分な時間をかけて丁寧に行うこと

「不登校の児童生徒等への支援の充実について（通知）」「不登校児童生徒への支援に対する基本的な考え方（別紙）」 R5.11 文部科学省

上記の文部科学省の通知も参考に、本年度は多忙な学校現場において「スリンプル・プログラム」の導入をきっかけとして、人間関係づくりへの教職員の意識を高めることを目的とした。学校が継続して取り組むことができるよう当センターとしてどのようなサポートを学校に対して提供することが可能なのか、どのような取組が教職員の意識に影響するのか、協力校における実践を踏まえ検討することとした。そして、次年度以降、当センターが実施する研修事業における研修講座や出前講座等の学校・教職員支援事業において、提供可能な事柄等を整理することとした。

## 3 研究の方法

### （１）「スリンプル・プログラム」の導入と継続的な取組の調査

「スリンプル・プログラム」の導入と継続的な取組について、他機関ではどのようにサポートしているか調査を行う。取材先は、以下のとおりである。

#### ■教育委員会、教育センターへの取材

雲南市教育委員会  
出雲市教育委員会  
大分県教育センター

#### ■学校への取材

愛知県春日井市立西山小学校  
大分県立竹田高等学校

### （２）「スリンプル・プログラム」の学校への導入サポートの実践

県内で「スリンプル・プログラム」に取り組みたい学校への導入サポートを行う。学級づくりや仲間づくりへの意識を高めるために、多忙な学校現場にどのようなサポート体制がよいかを明らかにする。

## 4 研究の内容

### (1) 県内の教育委員会の調査

#### ① 雲南市教育委員会の取組

雲南市は 2022 年(令和 4 年度)より「雲南市不登校対策プロジェクト」を進めており、今年度で 3 年目となる。不登校児童・生徒を減らすために共通して取り組む事項の重点化「不登校への未然防止と初期対応の充実」の取組として、「①学校が安全・安心な場所となるための基礎的・基盤的取組の充実 ②チームとして協働し対処する ③支援記録などのデジタル化で情報を共有する」(雲南市教育委員会 R6 :p 4 .p 7 .p 9) ことを挙げている。

この「①学校が安全・安心な場所となるための基礎的・基盤的取組の充実」として「不登校ガイドラインの活用促進」「不登校対応力育成講座」「集団づくり・学級づくりの研修講座」があり、「集団作り・学級づくりの研修講座」として「名城大学：曾山氏の研修会」(現在はかかわりプログラム Simple 代表)が位置づけられていた。

この研修会は毎回学校を会場に 3 年間実施しており、会場校だけでなく各学校からの参加を要請し、市内ほとんどの教職員がこの研修会を受講したとのことである。3 年間の会場校は以下のとおりである。

令和 4 年度 加茂中学校、三刀屋小学校

令和 5 年度 大東中学校、西小学校、木次小学校、斐伊小学校

令和 6 年度 吉田中学校区(吉田中学校、吉田小学校、田井小学校)、掛合中学校、掛合小学校

今年度の研修会の受講者の感想としては次のようなものがあつた。

- ・「型」の大切さと「型」があることの安心感に気付いた。
- ・価値づけや振り返りを大切にするなどのポイントを理解できた。
- ・プログラムの意義と価値について再認識できた。

曾山氏の講義を直接受けることで、すでに取り組んでいる教職員であっても改めて気付いたことや再認識した内容があつたことが分かる。そして中学校区を基本とした開催であることから、校区内の教職員は基本的に全員参加であつた。そのため「全職員で受講できたことで共通理解が大きく進んだ。」という感想があつたことも特徴的だったと言える。

また、各学校には『誰にでもできる中 1 ギャップ解消法』『超多忙でも実践できる！スリンプル・プログラム』(曾山氏著)の 2 冊を配布し、各学校が「スリンプル・プログラム」に取り組めるよう支援している。書籍の配布と曾山氏を招いての研修会の実施を経て、今年度は市内すべての中学校(6 校)と 14 校(15 校中)の小学校が実施しているとのことである。

#### ② 出雲市教育委員会の取組

出雲市は令和 6 年 2 月、「出雲市不登校対策指針」を策定し、これまで特別支援教育担当者が中心となって進めてきた「だんだんタイム(よりよい人間関係づくり・対話力育成プログラム)」を不登校対策として位置づけた。指針では、不登校対策の基本的な考え方として「不登校の未然防止に努めるとともに、不登校になったとしても、学校だけで



はなく多様な学びの場を確保し、個々の学びを保証する。」(出雲市教育委員会 R6 :p15)と示した。「スリンプル・プログラム」は、この「不登校の未然防止」の取組の一つである。指針の中では「だんだんタイム」に関して次のように記述されている。

#### IV 不登校対策の各施策

##### 1 不登校の未然防止

###### ① 居場所づくり・絆づくりの促進

全ての児童生徒にとって、学校、とりわけ所属する学級が安心・安全な居場所となるよう取組を行う。特に児童生徒のソーシャルスキルやコミュニケーション能力の向上を図るため、特別活動の充実を図るとともに、市内全校で「だんだんタイム(よりよい関係づくり・対話力育成プログラム)」の実施を推進する。

「出雲市不登校対策指針」R6.2 出雲市教育委員会

「だんだんタイム」については、これまでも各学校へのサポートとして指導主事による体験型研修の実施や指導上の留意点などがまとめられた「だんだんタイム(概要版)」の配布等がなされてきた。しかし、1年次の紀要でも述べたように、実施している学校では、その成果を感じつつも、マンネリ化やお題の設定など教職員が負担に感じる場合があることや、意義が曖昧になっているなど課題も見えてきていた。

そのため、今年度不登校対策指針の施策として挙げたのを機に「だんだんタイム」のリスタートとして数年ぶりに中学校を会場として曾山氏を招いての研修会が実施された。当日は生徒対象に師範授業が行われた(図3)。曾山氏は「人間関係の達人になれば、学校生活も社会生活も幸せになります」と、この活動の意義を伝えられた。



図3 曾山氏による師範授業

後日、出雲市教育委員会の担当者に話を聞いたところ、今回の研修会を通して「スリンプル・プログラムが正しく理解されていない」という大きな課題が見えたとともに

に、「だんだんタイムのリスタートに向けて大きな成果があった」とのことだった。参加者からは「レクリエーションのひとつと考えていて、盛り上がりや楽しさを重視していた」「凝った質問を考えていたが、生徒が答えやすい質問を作成する」「前半の評価や後半の振り返りができていなかった」などの感想があり、学校によっては「だんだんタイム」の形骸化が危惧される記載もあったが、「指導者の在り方のイメージをつかむことができた」「短い言葉で説明や指示を出し、テンポよく進行していくことの大切さが分かり、見習っていききたい」など、今後に向けて正しい理解の機会となったことも窺えた。

新たに導入する学校には事前体験研修等の指導があるが、継続している学校には特にサポートや途中の訪問指導等はなかったとのことである。学校の自主的な研修に任せてあり、必要な学校は、市教育委員会のポータルサイトから必要な情報をとることはできていたが、教育委員会として各学校がどのように「だんだんタイム」を実施しているか把握はできていなかったそうである。

今回の研修会を経て、教育委員会としても「だんだんタイム」を今後どのように活かしていくか検討を重ねるとのことである。

### ③ 雲南市教育委員会と出雲市教育委員会の取組から

雲南市と出雲市の「スリンプル・プログラム」への取組から見えてくるのは、「教職員の共通理解」「モチベーションの持続」の難しさである。どちらも市教育委員会が中心となって進めているが、学校全体で取り組むにはいかに一枚岩になれるかが鍵となる。研修を受けた担当者が一人で校内に広めようとする、共通理解を図るのも、準備を進めるのも負担が大きくなってしまふ。その点、市教育委員会が研修会を実施したり、導入サポートがあったりすると教職員の共通理解や担当者の負担の軽減にもつながる。

また、継続して取り組んでいる学校でも、校内での申し送りのみでは「スリンプル・プログラム」のそれぞれの活動の意味や意義が伝わりづらく、形骸化してしまうことがある。児童生徒や教職員の飽きやマンネリ感から、楽しさ重視のレクリエーションになってしまうことも容易に予想がつく。それを防ぐには曾山氏からの指導や、教育委員会など外部からの働きかけが必要だと感じる。

出雲市では、市教育委員会としての「だんだんタイム」の周知やかかわりを今後検討するとのことである。雲南市でも中学校区ごとの研修会は今年度で終了するが、次年度はフォローアップとして希望する学校へのサポートをしていくとのことである。

## (2) 大分県教育センターの調査

大分県では、県内全ての公立小中高等学校及び義務教育学校で、短時間で継続的（10 分間・週 1 回程度）に行う「人間関係づくりプログラム」に取り組んでいる。

取組の概要やサポート体制について、いじめや不登校等に関する相談及び訪問支援（アウトリーチ）を行っている大分県教育センター教育相談部の小林部長、後藤指導主事からお話を伺うことができた（図 4）。



図 4 大分県教育センターの取材

### ① いじめ・不登校に係る取組

大分県教育センターでは、平成 27・28 年度に、いじめ・不登校を生まない学級及び学校づくりの促進につなげることを目的とし、大分県版「人間関係づくりプログラム（小学校版・中学校版・高等学校版）」冊子を全公立学校に配布している（図 5）。プログラムは、友だちづくり（他者理解・信頼他者）、自分づくり（自己理解・自己肯定感・自尊感情の向上）、仲間づくり（相互理解・合意形成・調整力・リーダーシップの向上）から構成され、構成的グループエンカウンター、ソーシャルスキルトレーニング、アサーショントレーニング、グループワークトレーニング等、市販されている教育資料等を



図 5 大分県版人間関係づくりプログラム



引用、参考にしながらまとめられている。エクササイズの内容、実施時期のタイミング、展開やワークシート等が掲載されており、学級担任が学級活動やホームルームの時間に活用しやすい役立つ一冊となっている。

大分県教育委員会は、平成 30 年度から「いじめ見逃しゼロ」をスローガンに、様々ないじめ・不登校対策に取り組んでいる。不登校に対する支援をまとめた図 6 に示すように、多様な学びを支援し、児童生徒の社会的自立を目指している。



図 6 大分県の多様な学び

いじめ・不登校を生まない魅力ある学校づくりに向けた学校現場の当時の現状について、大分県教育委員会は以下のように述べている。

#### 【現状】

- 児童生徒の良好な人間関係を築く取組が不十分
- いじめの認知件数の増加、不登校出現率の増加
- ベテラン教員の大量退職と経験の少ない若手教員の増加
- 大分県版「人間関係づくりプログラム」（小・中・高編）は策定されているものの、全教職員に普及されていない

「短時間で継続的に行う『人間関係づくりプログラム』実践ガイド」より一部抜粋 R3.3 大分県教育委員会

平成 27・28 年度に大分県教育センターが配布した大分県版「人間関係づくりプログラム」は、一単位時間でまとめられていたことや、実施の有無が各学校の教職員の判断に任されていたこと等から、教職員に普及しなかった。そこで、これらの現状を踏まえ、「①魅力ある学校づくりの促進 ②いじめの認知力の向上や早期解決や新規の不登校出現数の減少 ③教職員の学級経営力の向上」（大分県教育委員会 2021:p1）を期待し、大分県教育委員会の学校安全・安心支援課が「短時間で継続的に行う『人間関係づくりプログラム』（以下、短時間プログラムとする）を打ち出した。そして、令和 3 年度から大分県内全ての公立小中高等学校において「短時間プログラム」の実施が始まった。

② 「短時間で継続的に行う『人間関係づくりプログラム』とは

図7は、全面実施に至るまでの経緯を示したものである。令和元年度は大分県教育センターが小学校と中学校で調査研究を、令和2年度は大分県教育委員会が大分県立学校で実践研究を行った。

また、大分県教育委員会は、人間関係づくりプログラムの実践ガイド（図8）を策定し、大分県内の小中高등학교に配布した。

大分県教育センターと大分県教育委員会が連携しながら、段階的に事業体制を整えていった。「短時間プログラム」は、大分県版「人間関係づくりプログラム」を参考に、「構成的グループエンカウンター」や「ソーシャルスキル」を取り入れ、短時間で継続的に実施するものである（図9）。

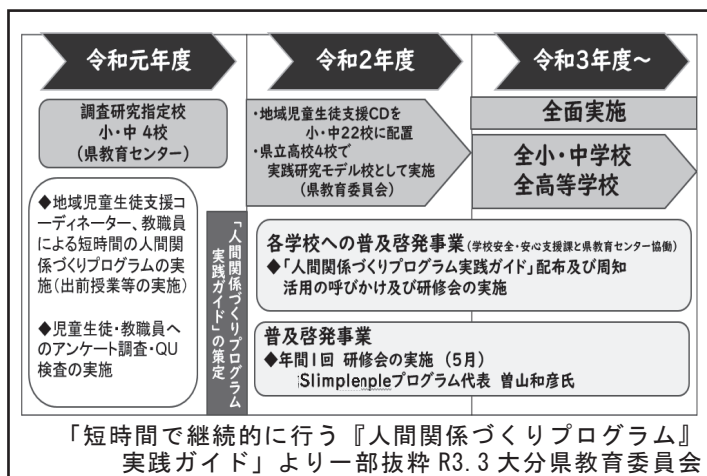


図7 全面実施までの経緯



図8 人間関係づくりプログラムの実践ガイド

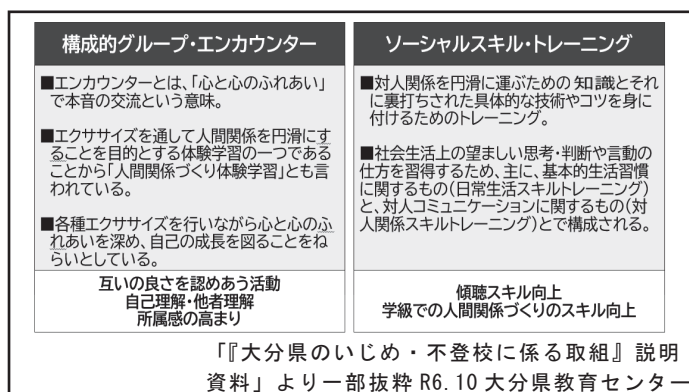


図9 短時間で継続的に行う「人間関係づくりプログラム」の内容

大分県教育センターは、令和5年度に「高校における短時間で継続的に行う『人間関係づくりプログラム』の効果的な活用に関する調査研究（2年次/2年）」を行った。成果については、以下のように述べている。

- 生徒のアンケート結果分析では、経年変化を見ても、一貫して好意的に短時間プログラムを受けとめており、クラスの居場所づくりによる影響を感じるだけでなく、各授業においてもよい影響を感じていることがわかった。授業のどの場面でよい影響を与えたのかの質問に対して、R4年度は「ペアまたはグループワーク」が67%と最も多かったが、R5年度では「質疑応答」までも47%から61%まで大きく伸びた。
- 実践校2校（A校：3年間、B校：2年間）でアンケートの比較をすると、継続することで2校間の差がなくなり、全ての項目が肯定的な評価に向上した。継続して実践することによる確かな効果が見られた。3年間継続して短時間プログラムを行ったA校では「協調性（自分とは異なる環境や立場にいる人と協力しながら物事を進めていく力）」、「価値観の広がり（自分以外の人のアドバイスを受け入れたり、新しい考えを取り入れたりする力）」、「他者肯定感（相手のありのままを認める感覚力）」を高める可能性があると感じた割合が表のように上昇した（図10）。

「高校における短時間で継続的に行う『人間関係づくりプログラム』の効果的な活用に関する調査研究（2年次/2年）概要版」より一部抜粋 R6.3 大分県教育センター

このように、高等学校においても短時間プログラムに継続的に取り組むことは、ソーシャルスキルだけではなく、共感的な人間関係を育み、将来の社会生活の中で必要な多様性の受容につながっていくと感じた。これらの力は、短時間で身につくものではない。「短時間プログラム」に継続して取り組むことは、自他の理解、コミュニケーション力などのキャリア教育の育成すべき能力の一つである人間関係活用能力にもつながっていくと感じた。

大分県教育委員会義務教育課は、人間関係づくりの取組と合わせて、授業づくりのポイントをまとめた「新大分スタンダード」を展開している（図11）。「新大分スタンダード」は、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着に加え、「学びに向かう力」と「思考力・判断力・表現力」の育成を目指すものである。

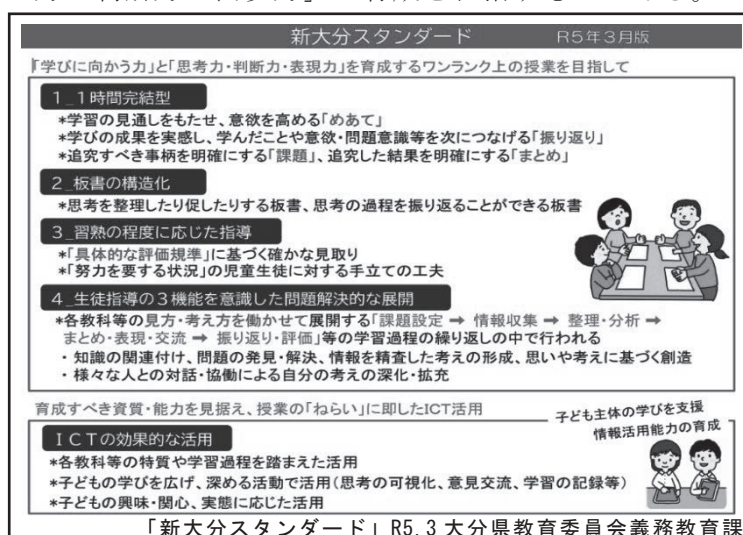


図11 新大分スタンダード

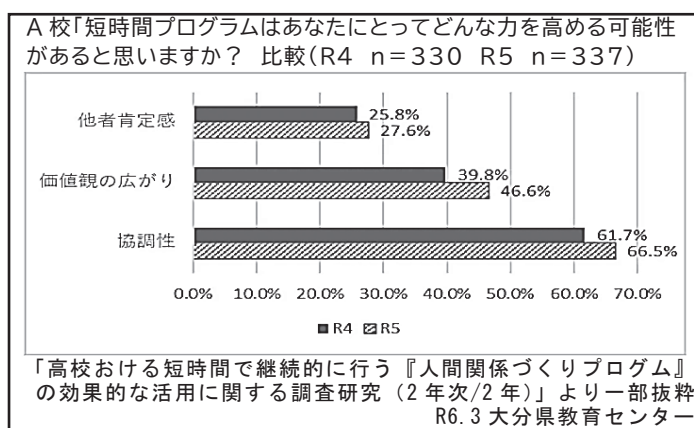


図10 生徒アンケートの結果

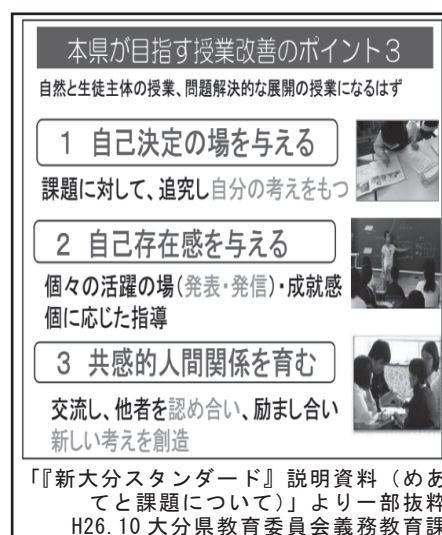


図12 生徒指導の3機能を意識した授業改善のポイント

また、大分県教育委員会義務教育課は、「新大分スタンダード」の説明資料（めあてと課題について）の中で、以下のように述べている。

「新大分スタンダード」のポイントの三つ目は、生徒指導の三機能を意識することです。生徒指導の三機能を意識すれば、自ずと児童生徒の主体的な学び、協働的な学びが実現できると考えられます。

『「新大分スタンダード」説明資料（めあてと課題について）」より一部抜粋 H26.10 大分県教育委員会義務教育課

このように大分県では、「短時間プログラム」だけでなく、日々の授業においても生徒指導の3機能を意識した授業づくりを行っている（図12）。「短時間プログラム」を用いた関係づくりと「新大分スタンダード」で示した授業づくりの2軸を継続することで、学校が子どもたちにとって安心できる学びの場となり、子どもたちの学力の向上に寄与していくと考える。



### ③ サポート体制について

大分県教育センターが行った、「高校における短時間で継続的に行う『人間関係づくりプログラム』」の効果的な活用に関する調査研究の課題を、以下のようにまとめている。

#### ・教職員の長期的な成果への理解

短時間プログラムを継続的に行うことによる生徒の長期的な成果についての理解がまだ十分に進んでいない。短時間プログラムは「対話の練習」ととらえられがちであるが、「それぞれの視点や価値観のやりとりの仕方を学ぶ」場であり、「人間関係づくり」につながる。そのことを教職員が認識して組織的に取り組むことができるよう、有用性を感じている生徒の声や具体的な効果等を研修で発信していく必要がある。

「高校における短時間で継続的に行う『人間関係づくりプログラム』の効果的な活用に関する調査研究（2年次/2年）概要版」より一部抜粋 R6.3 大分県教育センター

上記の課題を踏まえ、大分県教育委員会と大分県教育センターが協働して、各学校での「短時間プログラム」をサポートしている。曾山氏を講師に招き、各学校から必ず1名以上が参加する研修会を開催している。また、出前研修等の校内研修会の実施に加えて、初任者研修等の資料に「短時間プログラム」を掲載するなど普及に努めている。

また、例年通りの内容にしていると、各学校においてマンネリ化や目的を見失うことがあるため、毎年重点的な取組を掲げて学校に提案している。令和6年度の重点的な取組は、組織的な校内体制における計画的実施である。週1回10分の実施時間の確保や教職員の共通理解の促進、校内事情を考慮した運用方法等、取り組む内容を具体的に示し、学校の自走を支えている。「短時間プログラム」をツールとしながら実践と振り返りを繰り返すことで、よりよい学級づくりや信頼できる人間関係づくりの構築に努め、いじめ・不登校を生まない魅力ある学校づくりの推進に取り組まれていることが分かった。

### （3）先進的な学校の調査

1年次の研究では、10年に近い実践を継続して行っている愛知県の2校の中学校から、推進のためのノウハウや円滑な運営の仕方について学んだ。当センターとして島根県内の学校へのサポート体制を検討するにあたり、小学校や高等学校での取組について学びたいと考え、下記の学校を訪ねることとした。

#### 【各学校の概要と取材内容】

##### ■愛知県春日井市立西山小学校（にこにこタイム） 全校児童 200 人程度

「スリンプル・プログラム」導入は 2016 年 今年度実践 9 年目

取 材 日：令和 6 年 10 月 24 日

取材内容：校長と教務主任からの取材と全学年のにこにこタイムの参観

##### ■大分県立竹田高等学校（スマイルタイム） 全校生徒 360 人程度

「スリンプル・プログラム」導入は 2020 年 今年度実践 5 年目

取 材 日：令和 6 年 10 月 15 日

取材内容：校長と教頭からの取材と全学年のスマイルタイムの参観

## ① 先進校：愛知県春日井市立西山小学校の実践

春日井市の北側に位置する春日井市立西山小学校は、児童数 201 名、教職員数 22 名、学級数 10 の学校である。視察の目的は、新しく「スリンプル・プログラム」を導入した学校が直面する教職員の意識の差や取組のマンネリ化の解決に向けた工夫を見つけることである。授業観察やインタビューから、以下に工夫をまとめる。なお、西山小学校では、「スリンプル・プログラム」に係る研修をにこにこ研修と呼んでいる。

### ア 教職員の意識の差を埋める工夫

#### ■校務分掌への位置づけ

西山小学校では、教務主任を中心にした SST/SGE（ソーシャルスキルトレーニング/構成的グループエンカウンター）担当を校務分掌に位置付けている。担当が、にこにこ研修及びにこにこタイムの運営を行っている。年度当初のにこにこ研修では、にこにこタイムの意義やめざす姿を示し、共通理解を図っている。この時に、実際にエクササイズの一つである「いいとこみつけ」を体験する時間を設けることで、学級で実際に行うイメージも共有している。教職員もエクササイズを体験することで、児童の立場を感じることができ、にこにこタイムの指導に生かすこともできる。年間を通して、新しいエクササイズに入る前には、エクササイズを体験する時間を設けている。にこにこ研修におけるエクササイズの体験は、教職員間の人間関係づくりにもつながっている。

#### ■教職員が自分事として取り組むようになる手立て

担任だけでなく、担任以外の教職員も意識を高くもち「チーム西山」として取り組むために「先生シャッフル」という取組をしている。管理職や専科も含めて、いつ、どの学級でどのようなエクササイズを行うかの計画が示されている。その結果、すべての教職員が自分事として、にこにこ研修にも参加するようになる。また、週 1 回のにこにこタイムにも関心をもち、担当でない場合でも教室へ足を運ぶようになり、自然と児童の様子について教職員同士が話をする姿も見られるようになったとのことである。自分事として考えることで、児童を中心に据えた教職員間のコミュニケーションの輪が広がっていると感じた。

#### ■教職員用の「にこにこファイル」の作成

全教職員に 1 冊ずつ「にこにこファイル」を配付している。「にこにこファイル」には、年間指導計画や指導案を綴じてあり、見通しをもって教育活動を進めることができるとともに、新しく赴任した教職員が参考にすることができるように整えられている。

### イ マンネリ防止の工夫

#### ■学年シャッフル

西山小学校は、9 年間にこにこタイムを継続している。その経過の中で、先生



シャッフルだけでなく、学年間で児童同士を入れ替える「学年シャッフル」も試み始めている（図 13）。昨年度は、5 年生に 6 年生の姿を手本にしてほしいという願いから、まず、5・6 年生のみで試した。クラスの半数を入れ替え、2 学年が混ざったグループでエクササイズを行った。6 年生とのつながりができることで、5 年生の高学年としての意識の変容が見られた。学年間をシャッフルする効果を教職員側も実感したので、今年度は、1 年生と 6 年生、2 年生と 6 年生、3 年生と 5 年生、4 年生（2 クラスを半数ずつ入替）という計画で、全校で行っている。



図 13 1 年生と 6 年生の学年シャッフルの様子

### ■講演会の実施

4 年生以上の児童に対して、にこにこタイムの意義を知ってもらうために、曾山氏の講演を聞く機会を設けている。その結果、児童自身がにこにこタイムの目的やよさを知り、自分たちの成長に気付き、自信につながっているとのことだった。

### ウ 視察を終えて

教職員や児童の変容を校長と教務主任にインタビューをした。以下に、内容をまとめた。

西山小学校は、不登校の児童がいない状態である。別室登校の児童が 2 名いるが、その児童もにこにこタイムに参加するようになっている。また、場面緘黙で低学年時は筆談で参加していた児童も、学年が上がるにつれて話せるようになった。

児童だけでなく教職員間のコミュニケーションも活発になり、自然とその場で児童のよい姿などの情報共有が行われるようになっている。全校が集まる場やにこにこタイム以外の場でも、教職員がアイメッセージを使っている姿が増えてきている。全校が集まる場での指導者の姿が、他の教職員のモデルになっている。

西山小学校の卒業生の多くが進学する中学校でも「スリンプル・プログラム」がスタートしている。それぞれの学校からの要望で始まっており、西山小学校の教職員が講師として広めている。

全学年の指導計画や指導案、教材の資料を当センターへも提供してくださった。これらの資料は、島根県内の学校への導入サポートに活用させていただいた。

視察を通して感じたのは、目の前の児童の姿に応じて、新たな試みをされていること、児童を中心に据えて、教職員間の人間関係が円滑に構築されている様子があったことだ。そして、これらが学校の安心・安全な環境づくりにつながっていると感じた。

## ② 大分県立竹田高等学校の実践

大分県立竹田高等学校（普通科）は、熊本県と宮崎県に隣接する大分県の南西部に位置し、生徒数 360 人規模の高等学校である。壁面には学びの象徴として、「夢への挑戦」、

「駆け上がれ夢への階段」（図 14）と記されている。2020 年度（令和 2 年度）より「短時間プログラム」をスタートさせ、現在 5 年目に当たる学校である。昨年度は、曾山氏を招いた研修会を開催する等、積極的に取り組まれている。高等学校での取組について、大分県教育センターの後藤指導主事同行の元、西村校長と小野教頭にお話を伺うことができた（図 15）。



図 14 校舎壁面に記された竹田高等学校の学びの言葉



図 15 取材の様子

## ア 体制づくり

### ■学校の重点目標

竹田高等学校では、月に 1～2 回程度、火曜日の 7 限後にスマイルタイムを実施している。目的は、ペアやグループでの活動を通して多くのクラスメイトと触れ合い、他者理解や自己理解を深めることと、生徒の良好な人間関係を構築し、いじめ・不登校を生まない魅力ある学校づくりを促進することである。学校の 4 つの重点目標のうち 1 つは、対話を通じた多様性の認め合いや支え合いによる生徒誰もが輝く「活躍の場」や「居場所づくり」である。その達成に向けて、生徒指導の 3 機能（自己決定、自己存在感、共感的人間関係）を意識し、教師－生徒間、生徒－生徒間の共感的人間関係を構築すると基本方針に掲げている（大分県立竹田高等学校 R6 :p11）。

### ■組織づくり

校内では、保健・教育相談部がスマイルタイムの計画を立て、学級単位で担任等を中心に取り組んでいる。年間行事予定に組み込みシステム化することで、教職員の取り組みに対する意識を高めている。学期に数回の実施状況の学校もある中、月 2 回の実施を継続していくためにも、教職員で体制を見直し、業務改善を行いながらよりよい方法について検討を重ねている。

### ■スマイルタイムの授業見学

実際に、スマイルタイムの見学をさせていただいた。図 16 は、令和 6 年度の年間計画である。伺った日は二者択一に取り組んでお

| 令和 6 年度『スマイルタイム』年間計画 |        |                          |                                              |                        |
|----------------------|--------|--------------------------|----------------------------------------------|------------------------|
| 実施時期                 | 内容     | めあて                      | 構成人員                                         |                        |
| 1 学期                 | 4月 16  | オリエンテーション<br>《指導要録は読んだか》 | 『スマイルタイム』の目的、具体的な取り組み内容を<br>を知る。             | グループワーク                |
|                      | 23     | アドジャン                    | 流れを知る。クラスの友だちのことを知る。                         | グループワーク                |
|                      | 5月 8   | 二者択一                     | 流れを知る。                                       | ペアワーク                  |
|                      | 21     | いじめと不登校                  | 流れを知る。友だちのいじめを気づける。<br>自分のいじめを気づける。          | ペアワーク                  |
|                      | 6月 11  | 1分間スピーチ                  | 流れを知る。クラスの友だちのことを知る。<br>自分のことを相手に伝える。        | 4～5人<br>グループワーク        |
|                      | 7月 1   | WEBQJ11(2冊)              | 自分のことを知る。                                    | 個人                     |
|                      | 2      | WEBQJ11(1冊)              | 自分のことを知る。                                    | 個人                     |
| 2 学期                 | 16     | 校対アンケート1                 | 1学期の活動振り返り。                                  | 個人                     |
|                      | 8月 27  | アドジャン                    | 自分のことを相手に伝える。<br>相手の考えを受け入れる。                | ペアワーク α3～4人<br>グループワーク |
|                      | 9月 10  | アドジャン                    | 自分のことを相手に伝える。<br>相手の考えを受け入れる。                | ペアワーク α3～4人<br>グループワーク |
|                      | 10月 15 | 二者択一                     | 自分のことを相手に伝える。<br>相手の考えを受け入れる。                | ペアワーク α3～4人<br>グループワーク |
|                      | 11月 5  | 1分間スピーチ                  | 話を聞きながらまとめて相手に伝える。<br>相手の考えを受け入れる。           | ペアワーク                  |
|                      | 18     | WEBQJ11(1冊)              | 自分のことを知る。                                    | 個人                     |
|                      | 19     | WEBQJ11(2冊)              | 自分のことを知る。                                    | 個人                     |
| 3 学期                 | 12月 3  | いじめと不登校                  | 友だちのいじめを気づける。<br>自分のいじめを気づける。<br>2学期の活動振り返り。 | 4～5人<br>グループワーク        |
|                      | 23     | 校対アンケート2                 | 2学期の活動振り返り。                                  | 個人                     |
|                      | 1月 14  | アドジャン                    | 自分のことを相手に伝える。<br>相手の考えを受け入れる。                | 3～4人グループワーク            |
|                      | 2月 4   | 1分間スピーチ                  | 話を聞きながらまとめて相手に伝える。<br>相手の考えを受け入れる。           | ペアワーク                  |
|                      | 3月 4   | いじめと不登校                  | 自分や友だちのいじめを気づける。<br>友だちからの被害を受け入れる。          | 4～5人グループワーク            |
|                      | 18     | 校対アンケート3                 | 1学期の活動振り返り。                                  | 個人                     |

※ クラス主体で実施し、プログラムの周知徹底を図る。担当教員は1人担任に限定しない。

※ 年度で教員は、学年内で人員の異動、全校での活動を入れる。

※ エキササイズの種類と実施頻度等によって検討・変更する。（教職員・生徒から意見募集）

※ WEBQJの実施予定：1回目 7月、2回目 11月

「研究に係る視察資料」R6.10 大分県立竹田高等学校

図 16 スマイルタイム年間計画

られた。あいさつや、相手を見てうなずきながら聴く等の基本的なルールに、否定せずに最後まで聴くことを追加している。共感的な人間関係を形成するためにも、否定せずに聴くことを定期的に継続して意識する場があることは、生徒たちのソーシャルスキルを高め居場所づくりにつながるとともに自己のかかわり方を見つめ直すよい機会になっていると感じた（図 17）。



図 17 スマイルタイムの様子

## イ 成果

### ■生徒対象アンケートより

竹田高等学校が実施した生徒アンケートの結果によると、生徒たちはスマイルタイムの時間を肯定的に捉えていることが分かった。図 18 は、学校生活の中で、どこで役立っているかの質問に対する回答である。授業と答えている生徒が 74%と高く、質疑応答やペア・グループワークで身につけたソーシャルスキルを活用していると考えられる。また、学校行事や休み時間と回答している割合も高く、授業以外の場面においても、学級を越えた他者とのかかわりにも役立っていると考えられる。

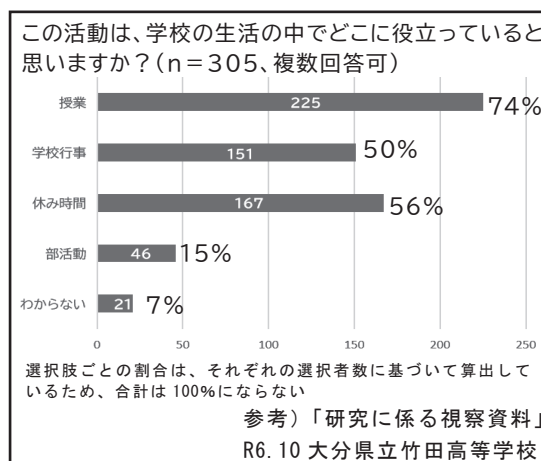


図 18 生徒アンケートより

竹田高等学校では、生徒の学級満足度や学級の状態を把握するために WEBQU を実施している。今年度 7 月時点の集計結果では、過年度と比較すると学級生活満足群が低く、学級生活不満足分が高くなっているが、学校では 2 学期の学校行事等により、さらに生徒同士の触れ合いが増えることで上昇に転じると予想されていた。スマイルタイムの継続によりかかわりの素地がある生徒たちだからこそ、教職員は焦ることなく見守ることができていると感じた。

当センターでは、この 2 年間をかけて、先進校の小中高等学校の取材を行ってきた。各学校での工夫や実際の取組について情報提供していけるよう整えたい。

#### (4) 「スリンプル・プログラム」の学校への導入サポートならびに成果と課題

##### ① 能力開発研修「学級づくり・仲間づくり講座」ならびに学校・教職員支援事業の実施

積極的・未然防止的な視点による活動を県内に広めるという視点から、曾山氏を講師に招き能力開発研修「学級づくり・仲間づくり」を開催して2年目になる。昨年度はオンライン開催となったが、今年度は5月30日に集合型研修を行った(図19)。受講者は、かかわる力が不足している現代において、意図的にソーシャルスキルを身につけるかかわる場の設定が必要なこと、教師と子ども、子ども同士の関係づくりの大切さ等について学んだ。また、「スリンプル・プログラム」のエクササイズ体験を通して、そのしくみやポイントについて理解を深めた。

教育委員会や学校から依頼を受け、学校・教職員支援事業として生徒指導と「スリンプル・プログラム」に関する研修会を6回(5月～9月)開催した(図20)。生徒指導上の課題を未然に防止するためには、全ての児童生徒を対象にした発達支持的生徒指導が重要であることや、「スリンプル・プログラム」について紹介した。各研修会の概要は下記のとおりである。

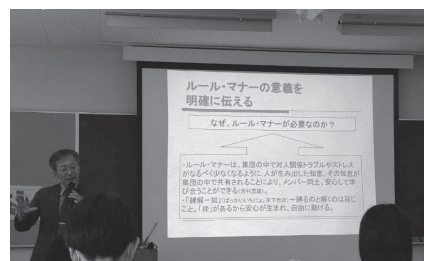


図19 学級づくり・仲間づくり講座の様子

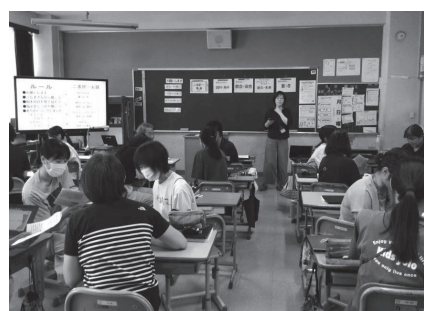


図20 学校・教職員支援事業の様子

##### 【各研修の概要】

###### ■能力開発研修「学級づくり・仲間づくり」講座の概要

日時：令和6年5月30日(木) 10時～12時 13時～15時

形式：集合型研修

受講者：小学校・中学校・義務教育学校・高等学校・特別支援学校の教職員

###### ■学校・教職員支援事業「スリンプル・プログラム」について

時期：令和6年5月～9月 6団体からの申し込み

受講者：小学校・中学校の教職員、生徒指導主任、指導主事 など

##### ② 研修後のアンケート結果より

能力開発研修や上記の研修会を受講した教職員を対象にアンケートを実施した。図21に示すように、発達支持的生徒指導について、個人では取り組んでいる、または取り組んでいるかもしれないが、本当にこれでよいのか不安を感じている教職員が半数以上という結果であった。学校全体で意識して取り組んでいる学校は少ないことが分かる。

また、「スリンプル・プログラム」に取り組む際に、多忙な現場においてどのようなサポートを希望するか調査した結果、図22のように、教材や指導案、年間計画の提供へのニーズが高いことが分かった。



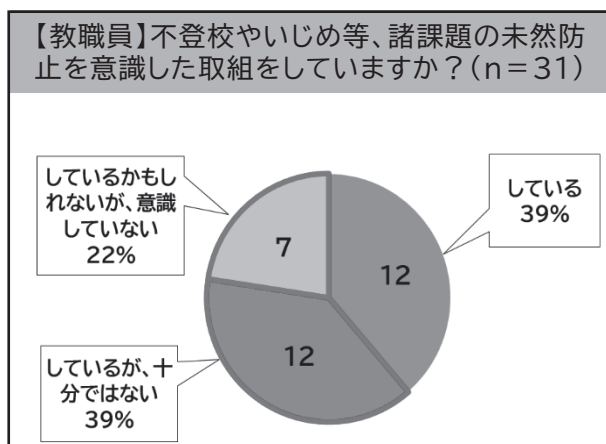


図 21 未然防止を意識した取組の実施の有無調査

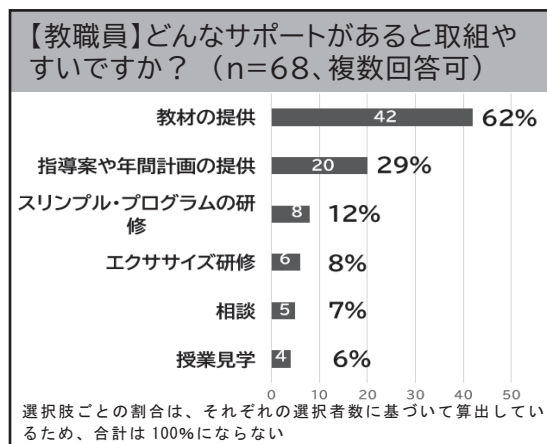


図 22 サポート体制についての調査

以上の結果を踏まえ、当センターで考えた「スリンプル・プログラム」の導入を支えるサポート内容は以下のとおりである。また、教材や指導案等をまとめたスタートアップセットを作成した(図 23)。

- 【サポート内容】
- 教材の提供
  - 管理職への説明
  - 学級づくりやスリンプル・プログラムの研修
  - エクササイズ研修
  - 打合せ、各種相談
  - 授業見学、振り返り

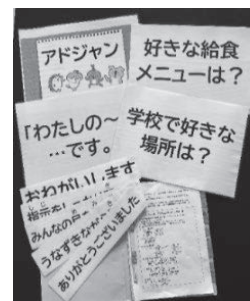


図 23 スタートアップセット

「スリンプル・プログラム」に取り組みたいと回答した学校等に、チラシ(図 24)やスタートアップセットについて紹介し、各校のニーズを把握した。小学校 5 校、中学校 1 校、特別支援学校 1 校の全 7 校に教材を提供した。その中から、小学校 2 校、中学校 1 校の計 3 校を協力校としてサポートすることとなった。3 校の概要は以下のとおりである。



図 24 チラシ

- 【協力校の概要】
- ◆浜田市立 A 小学校(いいねタイム) 全校児童 110 人程度  
「スリンプル・プログラム」導入は 2024 年 9 月 全校で導入(学級毎に実施)  
きっかけ: 人間関係が固定化する面があり、児童同士のかかわる力を高めたいから
  - ◆浜田市立 B 小学校(ほっとわくわくタイム) 全校児童 10 人程度  
「スリンプル・プログラム」導入は 2024 年 9 月 全校で導入(全学年一緒に実施)  
きっかけ: 友達同士の会話に否定的な面が見られ、子ども同士のかかわりを深めたいから
  - ◆浜田市立 C 中学校(ふかめたいム) 全校生徒 90 人程度  
「スリンプル・プログラム」導入は 2024 年 7 月 2 年生で導入  
きっかけ: 人間関係が固定的な面があり、グループ活動等をしていても話せる人・話せない人の差があるから

### ③ サポートの実際

#### ア サポート内容の詳細

##### ■教材の提供と打合せ・相談

エクササイズで使用する教材の提供に合わせて、週時程や年間計画、児童生徒への伝え方等について各校の担当教職員と打合せを行った（図 25）。学期ごとに年間計画を立てたり、長期休業中や放課後等に年 3 回程度の打合せを行ったりするなど、年度途中から新たなチャレンジをはじめる学校の負担にならないよう、学校や担当教職員の意向を確認しながら進めた。



図 25 打合せの様子

##### ■管理職への説明、学級づくりやスリンプル・プログラムの研修

「スリンプル・プログラム」を導入したいと思っている教職員のスタートアップをサポートできるよう、管理職にスリンプル・プログラムについて説明した。また、教職員が「スリンプル・プログラム」の目的について共通理解を図れるように、発達支持的生徒指導や学級づくりも含め、「スリンプル・プログラム」について研修会を行った（図 26）。教職員が意図的なかかわりの場を設定する有効性に気付けるように、アドジャンの体験を取り入れながら進めた。



図 26 教職員への説明の様子

##### ■エクササイズ研修

アドジャン、質問じゃんけん、二者択一、いいとこ四面鏡、一分間スピーチのエクササイズについて、各校のニーズに合わせて日時や内容を調整し、エクササイズ研修を行った（図 27）。30 分程度の研修内容とし、エクササイズ体験に加えて、価値づけや、教職員と児童生徒の縦のつながりの大切さを繰り返し伝える場となるよう意識した。



図 27 エクササイズ研修の様子

##### ■授業見学、振り返り

エクササイズごとに、各学校の授業見学をさせていただいた（図 28）。授業見学を通して、教職員の話をしっかりと聞く児童生徒の様子や、子どもたちの姿に対して効果的な価値づけをされていることなど、変容や感想等をお伝えした。継続していく中で、「スリンプル・プログラム」の型への意識が薄くなったり、レクリエーショ



図 28 かかわる様子

ンになったりしてしまう可能性もある。そのため、変容や感想を伝えることで、児童生徒は楽しむ時間、教職員はかかわる力の指導の時間であるという意識が継続するよう心がけた。

## イ 「〇〇タイム」に取り組んだ感想

児童生徒、教職員を対象にアンケートを行った。約9割の児童生徒は、図29に示すように、「スリンプル・プログラム」の時間を肯定的に受け止めていることが分かる。また、図30は、「〇〇タイムがはじまってよかったこと」についてまとめたものである。「自分のことを知ってもらえる」と回答した児童生徒が62%と多く、小学校、中学校ともに一番高い割合であった。また、半数以上の児童生徒が授業の中で話し合いがしやすくなったと回答しており、授業へのよい影響も見られた。

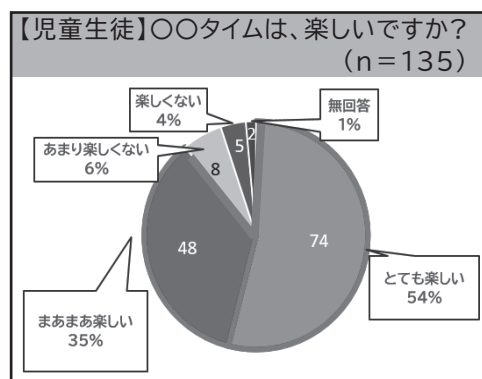


図29 児童生徒対象アンケート

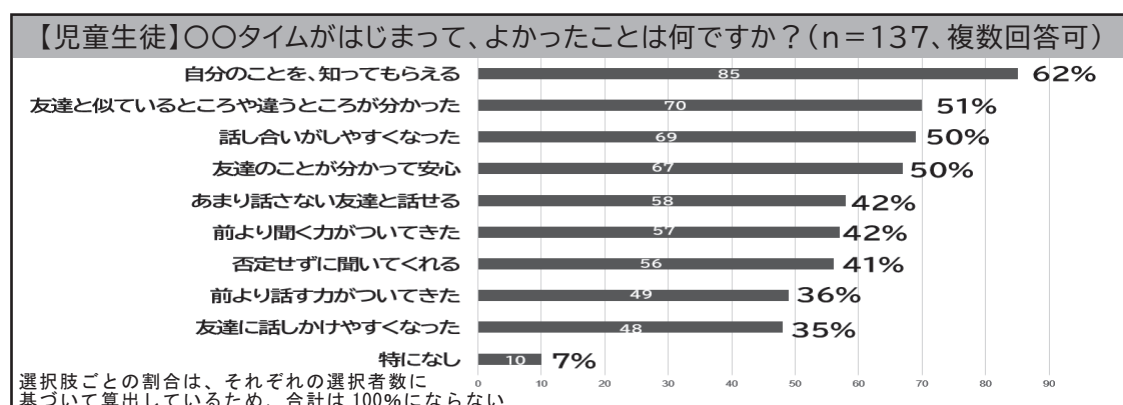


図30 児童生徒対象アンケートより

図31は、教職員に児童生徒の変容を調査したまとめである。77%の教職員が、子ども同士のつながりが強まったと回答している。『超多忙でも実践できる！スリンプル・プログラム 週1回10分の「〇〇タイム」で「かかわりの力」を育てる』（曾山氏著）の中でも、「気楽に、気軽に、気長に…スリンプルは『漢方薬』」（曾山2023:p11）と述べられているが、わずか4ヶ月程度で児童生徒の変容が見られている。

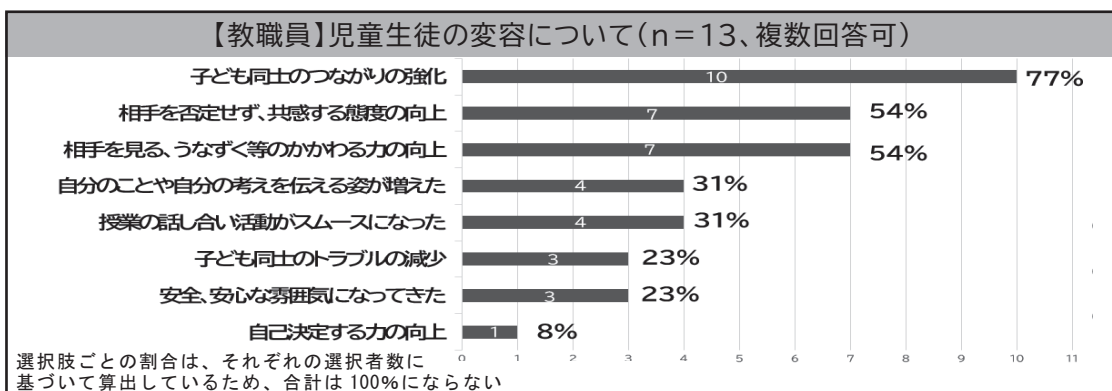


図31 教職員対象アンケートより

これらの結果を踏まえ、「スリンプル・プログラム」を手段として用いる有効性について、当センターにおいても実感している。意図的なかかわりの場面を設けることで、ソーシャルスキルが高まるだけでなく、固定化しがちな人間関係を緩和し、児童生徒同士のつながりが広がる可能性がみえる。これは、研修や振り返り等を通して、教職員で意義や方法を共通理解して取り組めた成果だと感じている。

一方、校内体制については課題が残る。次年度以降も継続していくためには、教職員の異動もある中で、意義や方法等を共通理解していく校内体制が必要となる。その重要性については各校にお伝えしてきたが、目的を見失わずに自走し続けていくためにも、先進校から学んだ組織体制づくりや校内研修の開催等のノウハウを参考に、2年目以降の伴走支援について、学校のニーズや実態を踏まえながら提案していけるよう検討していきたい。

## 5 実践および研究の考察とまとめ

### (1) 当センターのサポート体制について

学校現場の学級づくりや仲間づくりを支えていく一つの方法として、「スリンプル・プログラム」について学び、2年間の実践研究に取り組んできた。2年目となる今年度は、学級づくりを支えるサポートの在り方について、先駆的に取り組まれている教育委員会や先進校から学び、その内容を生かしながら、当センターのサポート体制について探り、教職員の意識の変容に注目した。このことについて、協力校の教職員からのアンケートをもとに考察していく。アンケートには、以下のような記述が見られた。

- ・教材を提供してもらったおかげで、大きな負担なく取り組むことができた。
- ・研修がシンプルでよかった。
- ・センターが身近に感じられるようになった。
- ・具体的な声かけや活動の仕方を教えてもらい実践しやすかった。
- ・授業を見てフィードバックがあることで、生徒の様子や課題等に気付くことができた。
- ・現場のことを考えて、丁寧なサポートだった。

※強調のための下線は筆者が施す

サポート体制についての問いでは、図 32 に示すように、教材や指導計画の提供が好評であった。教材等の提供は、多忙な学校現場にとって、取組をはじめる際の有効なサポートであったと考える。また、協力校のニーズを踏まえてはじめた、30 分で継続して行うエクササイズ研修も好評であった。短時間かつ時期や内容を、学校のニーズに合わせて実施したこと、またシンプルに学べたことが、この結果につながったと考える。教職員の意識の変容についての調査では、以下のような変容

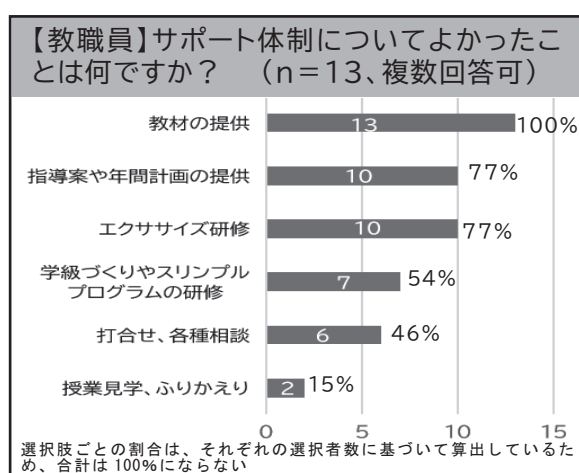


図 32 教職員対象アンケートより



が見られた(表 1)。

表 1 教職員の意識の変容

| 項目                 | 自由記述より                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|--------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 子ども同士のつながり         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>子ども同士の横のつながりの大切さに気付けた。</u></li> <li>・ <u>子ども同士の横のつながりが、さらに広がるようにしたい。</u></li> <li>・ <u>この活動を通して、「つながり」の重要性を再確認することができた。</u></li> <li>・ <u>つながりは自然にできるものではなくて、意図的なかかわりを積み上げていくことで形成されるものだと感じた。</u></li> <li>・ <u>手伝ってほしいとき、分からないことがあったときなどに、まずは友達に声をかけてみるように伝えるようになった。友達とかかわりにいけるような機会を作るよう、意識するようになった。</u></li> </ul> |
| 教師と子どものつながり        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>結果を急がず、子どもを見守れるようになった。</u></li> <li>・ <u>つながっていることの安心感は、子ども同士はもちろんのこと、教師にとっても安心感となり、私が子どもたちを信じることに繋がった。</u></li> <li>・ <u>授業と違って「何かを達成しなくてはならない」ことから解放される大切さを子どもの生き生きとした姿から感じた。このような時間を他にもとることで、子ども同士、教師と子どもの関係により影響がある。</u></li> </ul>                                                                               |
| 教師間のつながりや魅力ある学校づくり | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>子どもの姿を情報共有する回数が増えた。(2)</u></li> <li>・ <u>かかわる力を身に付けることによって、安心・安全な学校づくりや主体的・対話的で深い学びにつながっていくことが分かった。</u></li> </ul>                                                                                                                                                                                                    |

※強調のための下線は筆者が施す

このように、教職員と児童生徒とのつながり、児童生徒同士のつながり、教職員同士のつながりができることは、魅力ある学校づくりにつながっていくことを、協力校の教職員が感じている。定期的な実践ならびにエクササイズ研修を通して、継続して関係づくりの大切さに触れたことが、このような教職員の意識の変容につながったと考える。1年次の研究結果より、学級づくりや仲間づくりについて、経験の浅い教職員ほど困難さを強く抱えていることが明らかとなった。関係づくりを基盤とした学級づくりの重要性について、若手教職員が増える学校現場に伝えていくことで、関係づくりに対する教職員の意識を高めていきたい。

## (2) 次年度に向けて

これらの結果を踏まえ、次年度は以下のようなサポートをしながら、学校の学級づくりや仲間づくりを支えていこうと考える。

### ■能力開発研修「学級づくり・仲間づくり講座」

→曾山氏によるスーパーバイズ

### ■出前講座ならびに学校・教職員支援事業

→校内教職員に向けて意義や目的の共有化を図る

→エクササイズの習得ならびに関係づくりへの意識向上

### ■スタートアップセットの提供

→教材や指導案等を提供することで、はじめての取組を支える

前述したサポートにて、はじめて取り組む学校のスタートを支えていくだけでなく、取組を継続する2年目以降の学校もサポートしていく。校内の組織体制や校内ミニ研修の開催など、教職員が一枚岩となり行動していけるように校内体制づくりのサポートも大切であるが、継続していくためには、外部講師から意義や方法等を確認してもらう場も重要である。県内においても、「スリンプル・プログラム」に取り組む学校が広がっており、中学校が中心となり、校区内の小学校に広げる取組をされた学校が複数校ある。曾山氏をお招きし、実際の授業の様子を見ていただき、スーパーバイズを受けた学校もある。各校の自走に向けて、今後も取り組んでいきたい。

今回は「スリンプル・プログラム」をきっかけとしたが、かかわる力を高め人間関係を形成していくことは、安心な居場所づくりにつながり、安心できる環境で学ぶことは、社会性の育成や確かな学力につながっていく。「スリンプル・プログラム」を取り入れなくとも、学びの基盤となる学級づくり、仲間づくりの大切さについて教職員が理解を深め、そこに十分な時間をかけて丁寧に行う意識を高めていくことが、不登校の未然防止につながる第一歩だと考えている。

最後に、この実践研究に多くの助言をいただいた曾山和彦氏、取材に応じてくださった大分県教育センター、愛知県春日井市立西山小学校、大分県立竹田高等学校、雲南市教育委員会、出雲市教育委員会、そして協力校3校のみなさんに改めて謝辞を伝えたい。

この研究は、島根県教育センター教育相談スタッフ島田さつき、秋山朗子、永見修一、太田景子、恩田智恵が共同で行った。

## 【引用文献】

- ・ 出雲市教育委員会(2024)出雲市不登校対策指針 p. 9 pp.15-16
- ・ 雲南市教育委員会 (2024)不登校対策プロジェクト p. 4 p. 7 p. 9
- ・ 大分県教育委員会(2024)不登校児童生徒支援ガイド p. 8  
<https://www.pref.oita.jp/site/gakkokyoiku/futoukou.html> (2024.11.10 確認)
- ・ 大分県教育委員会(2021)短時間で継続的に行う「人間関係づくりプログラム」実践ガイド p. 1
- ・ 大分県教育委員会(2023)「新大分スタンダード」  
<https://www.pref.oita.jp/site/kyoiku/2001503.html> (2024.11.10 確認)
- ・ 大分県教育委員会 (2014)「説明資料(めあてと課題について)」p. 3  
<https://www.pref.oita.jp/site/kyoiku/2001503.html> (2024.11.10 確認)
- ・ 大分県教育センター(2024)「大分県のいじめ・不登校に係る取組」について説明資料 p. 11
- ・ 大分県教育センター(2024)高校における短時間で継続的に行う「人間関係づくりプログラム」の効果的な活用に関する調査研究(2年次/2年)概要版  
<https://www.pref.oita.jp/site/kyoiku/r5chousa-kenkyu.html> (2024.12.3 確認)
- ・ 大分県立竹田高等学校(2024)学校要覧 p. 11
- ・ 大分県立竹田高等学校(2024)研究に係る視察資料 p. 2
- ・ 島根県教育庁教育指導課 (2024)令和5年度生徒指導上の諸課題に関する状況調査 p. 2

- ・島根県教育庁教育指導課(2024)不登校に関するアンケート調査について pp. 1-3
- ・曾山和彦(2023)超多忙でも実践できる！スリンプル(スリム&シンプル)・プログラム 週1回10分の「〇〇タイム」で「かかわりの力」を育てる ほんの森出版 p.11
- ・文部科学省(2023)「不登校の児童生徒等への支援の充実について（通知）不登校児童生徒への支援に対する基本的な考え方（別紙）」 p. 4

## 【参考文献】

- ・愛知県春日井市立西山小学校(2023)にこにこタイム 実践報告・指導案集
- ・愛知県春日井市立西山小学校(2024)学校要覧
- ・雲南市教育委員会(2024)不登校の状況と不登校対策説明資料
- ・雲南市教育委員会(2022)雲南市不登校対策ガイドライン
- ・大分県教育センター(2015)大分県版「人間関係づくりプログラム」
- ・大分県立竹田高等学校(2024)学校要覧
- ・大分県立竹田高等学校(2024)研究に係る視察資料
- ・島根県教育庁教育指導課(2024)不登校に関するアンケート調査 調査結果
- ・島根県教育庁教育指導課(2024)不登校に関するアンケート調査について
- ・曾山和彦(2021)「気になる子」が通常学級に溶け込む!10の理論・10の技法. ほんの森出版
- ・曾山和彦(2019)誰でもできる！中1ギャップ解消法. 教育開発研究所
- ・文部科学省(2022)生徒指導提要（改訂版）
- ・文部科学省(2023)令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査
- ・文部科学省(2024)令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査